

## ドイツの保育施設における移民の背景を持つ子ども達の参画 —言語教育を観点として—

Partizipation der Kinder mit Migrationshintergrund  
in Kindertageseinrichtungen in Deutschland  
— unter dem Gesichtspunkt der Sprachförderung —

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI

(幼児教育講座)

(平成28年9月30日受理)

### I. 問題の所在と目的

筆者はこれまでドイツの保育施設における子ども達の参画が, 「幼児教育のための各州の共通大綱」<sup>1</sup>, 「バイエルン州幼児教育計画」<sup>2</sup> (以下, 原語より BEP と略) 及び「シュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン州幼児教育指針」<sup>3</sup> において, どのように位置付けられているか明らかにした (船越 2012, 2013, 2015)<sup>4</sup>。さらに, 参画は一つの確固とした教育理念—「多様性の教育」(Pädagogik der Vielfalt) によって支えられていることも明らかにした (船越 2016)<sup>5</sup>。

連邦移民難民庁の「移民報告 2013 年」によると, ドイツの人口の 5 人に 1 人, 10 歳未満の子どもでは 3 人に 1 人が移民の背景を持っている<sup>6</sup>。ドイツは, 第二次世界大戦後, 1950 年代から 70 年代にかけて多数の外国人労働者を迎え入れ, 定住した。90 年代に入ってから, 東欧地域から多数のアウスジードラーと呼ばれるドイツに出自を持つ人達が帰還した。さらに, 戦火を逃れて難民として流入してきた旧ユーゴスラビア出身者, 現在では, アフガニスタン, イラク, シリアからの難民が多数移住している。ドイツでは, 2015 年, 100 万人以上の亡命希望者が登録され, そのうち昨年中に 476,649 名が亡命許可の申請を行った。難民の主要出身国はシリアで, すべての難民の半数を占めていた<sup>7</sup>。

ドイツの多民族化に伴って, 移民の背景を持つ子ども達の学校や社会への統合はますます重要な

課題となっている。保育施設における子ども達の参画を考える上でも, 移民の背景を持つ子ども達の参画のあり方が問われなければならない。保育施設における日常生活への参画は, 民主主義の資質を育て, 初期の政治教育の確実な一歩である<sup>8</sup>。成熟した民主主義社会の実現のためには, すべての子ども達に民主主義社会を担う能力と資質を育てなければならない。その際, 移民の背景を持つ子ども達の参画にとって, 重要な前提条件となるのが, ドイツ語能力の獲得である。

以上の理由から, 本稿では, ドイツの保育施設における移民の背景を持つ子ども達の参画支援の一環としての言語教育について明らかにしたい。研究対象はドイツ 16 州の中でも移民の背景を持つ子ども達の割合が高く, 言語支援に集中的に取り組んでいるバイエルン州である。研究方法は BEP の教育領域「言語とリテラシー」と実際の取り組み, 及びインタビュー分析である。

### II. 先行研究

小玉 (2008) は, PISA2000 によって社会問題化したドイツの学力低下に伴う教育改革の中で, 幼児教育分野では言語習得が第一の課題となったこと, PISA の成績と社会階層の相関が高いことから, 知的教育への指向性が強まったことを指摘した<sup>9</sup>。中西 (2015) は, ドイツの幼児教育改革における知的教育及びリテラシー教育への対

応を明らかにするために、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の教育計画「言語とコミュニケーション」領域を観点に検討を行った<sup>10</sup>。恒川(2014)は、バイエルン州労働・社会・家庭・統合省のホームページ(2014年6月18日時点)における教育領域「ことばとリテラシー」に関する説明文の全訳を行った<sup>11</sup>。

以上の先行研究によって、ドイツの教育改革において、幼児期の言語教育が重要課題であることが明らかになった。しかしながら、保育施設における子ども達の日常生活への参画保障と言語教育を関連付けた研究は見られない。従って、本研究では、移民の背景を持つ子ども達の参画を観点に、言語教育について検討を行うことにする。

### Ⅲ. 参画は権利である

ドイツの保育施設では、子ども達の参画は権利として認められている。参画する権利は、国連子どもの権利条約<sup>12</sup>、及び1990年6月26日改正の社会保障法典(Sozialgesetzbuch VIII)における青少年法(Kinder- und Jugendhilfegesetz)によって守られているだけでなく、州の法律の中でも明示されている。

バイエルン州保育法(Bayerisches Kinderbildungs- und -betreuungsgesetz – BayKiBiG)第10条では、次のように規定されている。

第10条 保育施設における陶冶(Bildung)、訓育(Erziehung)、養護(Betreuung)の使命

- 第1項 保育施設は一人ひとりの子どもに最善の教育と発達の機会を保障し、発達のリスクに早期に対処し、インテグレーションの能力を身につけさせるために、多様で発達に応じた教育と経験の機会を提供する。適切な陶冶、訓育、養護は十分な専門性を備えた職員の投入によって、保障されねばならない。
- 第2項 子ども達は、発達に応じて、施設の日常及び施設の形成に参加されなければならない。(傍線は筆者による。)

ここで言う「子ども達」とは「すべての子ども達」という意味で使われていることから、移民の背景を持つ子ども達も当然、参画する権利を保障されなければならない。また、BEPでは、子ども達は参画する権利を持っていると同時に、参画しないことも権利として認めている<sup>13</sup>。ここで問

われなければならないのは大人側の態度なのである。つまり、権利を行使するという子ども側の自由意志に対して、子ども達の中に参画することへの関心と呼び起こし、参画を実現させる大人側の責務が対峙しているのである<sup>14</sup>。

### Ⅳ. BEPにおける言語教育

BEPが提唱する言語教育は次のような考え方によって支えられている。

「言語能力は決定的に重要で、学校と職業上で成功するための前提条件であり、社会的生活・文化的生活への十分な参加のための条件である。」<sup>15</sup>

以上のように、言語能力は、学校や職業だけでなく、民主主義社会の一員として、社会に参画するための条件であると捉えられている。すべての子ども達の参画が権利として認められているドイツにおいて、参画するための能力を習得させることは幼児教育の使命である。そのための前提条件こそが言語能力なのである。以下、保育施設における日常生活において、言語教育がどのように展開しているのかについて検討を行う。

#### 1. 対話の中での言語教育

BEPでは、子ども達は彼らにとって大切な人々との関係性の中で、及び環境を理解し構造を与えようとする試みの中で言語を学んでおり、言語習得は次のことに結びついている<sup>16</sup>。

- ①対話と個人的な親しい関係
- ②関心のある出来事
- ③子ども達にとって意味を生み出す行為(意味構築)

ドイツ連邦16州ではその特徴は様々であるが、ほぼ共通しているのは、「就学前の言語支援コンセプトでは、日常に統合されたものと、付加的なものに区別されている」ことである<sup>17</sup>。つまり、保育施設の日常生活の様々な活動や遊びの中で言語促進を行うことを基本にして、言語的に特別な支援の必要な主として移民の背景を持つ子ども達を対象に、補償教育的な意味合いの言語支援プログラムを提供している連邦州が多い。

ドイツの保育施設では、通常、朝の会を園全体、あるいはクラス全体で行っている。その際、重視されているのは、子ども達との対話関係の構築である。曜日、天候、出席確認、子ども達からの話

題だけでなく、本日の主活動やプロジェクト活動の内容の決定にも子ども達は参画している。つまり、一人ひとりが自分の意見を表現し、自己決定あるいは、共同決定することが主眼に置かれている。その際、保育者はドイツ語習得が不十分な子どもや、消極的な子ども達のために、ハンドパペットをクラスの一員として参加させることで、子ども達の気持ちをリラックスさせ、会話を促している。ハンドパペットは保育施設だけでなく、小学校の低学年においても同様の役割を果たしている。

BEP によれば、子ども達の言語発達にとって以下の点が重視されねばならない<sup>18</sup>。

- ①非言語コミュニケーション
- ②言葉でコミュニケーションしたり、対話をするモチベーションと能力
- ③リテラシーの発達
- ④二言語及び多言語の尊重

従って、朝の会では、子ども達の非言語コミュニケーションもまた、重要な言語発達の第一歩として受け止められ、子ども達のコミュニケーションと対話のモチベーションを持たせることに重点が置かれている。

また、保育施設では子ども達の関心にもとづき、意味を構築していく教育方法として、プロジェクト型の活動への参画が実践されていることも特徴である。

## 2. 言語能力観

BEP では、言語能力は様々な次元に結びつく複雑な現象と捉えられている。具体的には、文節、ボキャブラリー、文法、言語理解、コミュニケーション能力といった次元において機能してい

る。問われるのは、いつ、どんな脈略やシチュエーションで、子どもが言語的にアクティヴになり、特定の能力を使用し、拡大し、言語的に挑戦しようとするかである<sup>19</sup>。保育者に求められるのは、子ども達が日常の遊びや活動の中で、言語的にアクティヴになれる状況を作ったり、刺激を与えたり、共感し、援助することである。

さらに機能的な能力観では、言語の文化的次元にも強く注意を向けさせる<sup>20</sup>。文化的次元については次節であらためて考察することにする。

ここで、ミュンヘン市学校文化局（現在のミュンヘン市教育・スポーツ課）が提案している言語発達を促す遊びの事例を見てみよう<sup>21</sup>。

### 遊びの事例①

対象年齢：4歳～6歳

人数：4人まで

材料：袋、様々な物

方法：袋の中に様々な物が入られる。子ども達はトレーニングのために、両手だけを、感じとったり手で触るために中に入れてもよい。そして、袋の中で、手でつかんだ物をイメージして絵に描く。できれば名称を言ってみる。

目標：1. 触覚による知覚の促進、2. 形容詞の拡大

### 遊びの事例②

対象年齢：4歳～6歳

人数：4人まで

方法：農場にはどんな動物がいるかよく考える。少なくとも10種類の動物に気づいて、絵に描いたりする。後で、絵本で確かめたり、実際に農場へ行って、どの動物を忘れていたのか、どの動物



写真1. 朝の会で、ハンドパペットを使って会話を促す保育者



写真2. 小学校一年生クラスのハンドパペット



が存在しないのか比べてみる。続いて、森の動物及び野生の動物について取り上げることができる。子ども達は上位概念の基準から、適切な下位概念を発見しなければならない。

目標：1. 特別な分野の語使用の促進, 2. 主語の拡大

保育者は日常の遊びや提供活動の中で、このような言語発達の促進を促す場面を自覚的に作っていく必要がある。

### 3. 多言語の尊重

BEP では、多言語の尊重と促進は、ドイツ語学習と矛盾するものでなく、互いに補完しあうと捉えられている<sup>22</sup>。

日常の保育では、家庭言語の価値を省察するために、以下のことに留意しなければならない<sup>23</sup>。

- ①子ども達の家庭言語を使った教材はあるか
- ②二言語を話す職員の採用と連携はあるか
- ③保育者の基礎知識はあるか
- ④移民の両親等との連携はあるか

移民の子ども達にとっては家庭言語と文化の尊重を、他の子ども達にとっては文化的開放性、言語的好奇心、言語意識の促進という意味で、学習機会を開く<sup>24</sup>。

筆者がフィールドワークを行ったミュンヘンの保育施設では、子ども達だけでなく、保育者集団の多文化化も目立っている。保育者の多文化化は、子ども達にどのような影響を与えるのであろうか。筆者がフィールドワークを行ったミュンヘン市立 R 保育施設には、日本人の一級保育者ベルガー有希子氏が勤務している。ベルガー氏はすでに 25 年ほどドイツに住んでおり、ドイツ人の夫との間に 3 人の子どもがいる。ドイツの保育施設における価値観や文化は、日本とは異なる点が多い。このような中、日本人保育者は言語教育と異文化理解教育においてどのような役割を果たしているのかについて、ベルガー氏へのインタビューによって明らかにする。

#### a. 言語教育、言語支援の分野での役割について

「私の園には、現在幼稚園に 5 名、学童保育に 6 名の日本人が通っています<sup>25</sup>。学童保育の子ども達は午前中ドイツの小学校に通っているのです。言語支援については補助程度で大丈夫です。私は主に幼稚園に通う 3 歳～6 歳児の邦人に対するドイツ語支援と、邦人以外の子ども達に日本語また

は日本文化を紹介して、子ども達が異文化に興味を持ってくれるように働きかけています。例えば、ドイツ人の先生と一緒に絵本の読み聞かせを、日本語とドイツ語交互に読む活動を定期的に行っています。朝の集まりの時に、先生一人ひとりが設定保育を提案するのですが、その時にこの二ヶ国語読み聞かせについて紹介します。参加するかしないかを決めるのは子ども達です。日本人以外にも必ず数名の子ども達が参加します。日本人でも、その時にもっと魅力的な提案保育があったなら、読み聞かせに参加しないこともあります。今までで好評だった本は、『はらぺこあおむし』『にじいろのさかな』『スイミー』『ぐりとぐら』『14 ひきのあさごはん』などです。日本語を先に読んでから、ドイツ語を聞かせる方が話の内容が分かりやすいので、集中力が持続しやすいです。また、お祭りなどの行事の前には、その行事の説明を日本語でします。行事で歌う歌や手遊びなどは、意味をおさらいしながら、一緒に繰り返します。子どもは、何度か繰り返すと歌えるようになりますが、意味を教えてあげると、目が生き生きとします。」

ミュンヘン市立幼稚園だけでなく、筆者がフィールドワークを行ったシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の園でも、毎日保育者による提案保育が行われる。活動の選択をするのは、一人ひとりの子どもである。その際、参加しない権利も保障されている。既述したバイエルン州保育法の子ども達の参画する権利が保育の中で実践されていることが分かる。また、保育者は提案型の保育によって、自分の得意分野を活かした保育を行うことができる。ベルガー氏の場合、日本語と日本文化を伝えること、日本語で意味を伝えることで、ドイツ語の習得を促進することが自身の課題としていることが分かる。

読み聞かせとして選択している絵本は、いずれも多様性や異文化に対して開かれた価値観で描かれていることにも注目できる。保育者の絵本等の教材を選択する力が問われるのである。日本人の子ども達だけでなく、他の子ども達も二ヶ国語の読み聞かせを通して、言語の文化的次元に強く興味を持っていることが理解できる。

#### b. 自身の存在は、日本人の子ども達にとってどのような意義があると思うか

「外見的に類似した特徴（髪や肌の色など）があるため、仲間意識が芽生え、安心感を与えることができていると思います。これは日本人に限ら

ず、韓国人や中国人、フィリピン人の子ども達にとっても同じです。また、日本語を使えるので、困った時には相談することのできる避難所の役割を担っています。」

ドイツの保育施設の中で、マイノリティー的存在であるアジア圏が出自である子ども達にとって、ベルガー氏の存在は、安心感を与えていることが理解できる。安心感、安定感を持って園生活を送ることができて初めて、ドイツ語習得へのモチベーションも向上することは明らかである。

#### c. ドイツ人を含めて他の子ども達にとって、どのような役割を果たしていると思うか

「日本という異文化を知るための第一歩。夏祭りなど、学童と合同での活動では、着物のファッションショーをしたり、日本の伝統的な遊びの水風船つりをします。そのような体験の中で、日本を身近なものとして感じてもらえれば嬉しいです。特に、学童の子ども達とは、活発な言葉でのやりとりができるので、私自身も楽しいです。私の園では、時々日本から視察の方がいらっしゃるのですが、その時に、『こんにちは』と積極的に声をかけたり、サッカーワールドカップの時には日の丸を描いてみせる子ども達の姿があります。」

既述したように、BEPでは言語の文化的次元とともに、多言語の尊重と促進は、ドイツ語学習と互いに補完し合うと捉えられている。日本人の子ども達にとっては、家庭言語と文化的アイデンティティーの尊重に、他の子ども達にとっては言語的好奇心、言語意識の促進、異文化理解能力の習得という意味で、学習機会を開いているのである。

#### d. 他の保育者に対して、どのような影響を与えているか

「影響というと大げさですが、異文化に対して排他的ではなく、一緒に子ども達と向き合っていく仲間として、より良い保育環境を作り上げていくと助け合うことができます。日本人の保護者との対応で困った時には、すぐにお呼びがかかりますし、日本人の気質についてのディスカッションをすることもあります。国は違っても、子ども達の幸せを考える姿勢は、変わらないということを日々実感しており、私だけでなく、他の保育者もそう感じていると思います。」

子ども達の多文化化、多様化が進むにしたがって、保育者に求められるのは、異文化や多様性に対する開かれた価値観である。他の文化や価値観の違いに敏感であること、葛藤に対処し、コンセ

ンサスを導く能力を獲得しなければならない。二つの文化の狭間で生きているベルガー氏の存在は、保育者集団の育ちにとって重要な役割を果たしていると捉えられる。二言語を話す保育者との連携は、質の高い保育を作る上でも、必要なことなのではないだろうか。

## V. 保育施設における言語支援の取り組み

### 1. 観察シート Sismik

バイエルン州の保育施設では、移民の背景を持つ子ども達の言語とリテラシーの発達に計画的に同伴し、適切に観察するために、観察シート Sismik が使用されている。Sismik とは、“Sprachverhalten und Interesse an Sprache bei Migrantenkindern in Kindertageseinrichtungen”の略で、「保育施設における移民の背景を持つ子ども達の言語行動と言葉への関心」を観察するために、バイエルン州立乳幼児教育研究所で開発され、2003年より刊行されている観察シートである。さらに、ドイツ語で成長した子ども達のための観察シート Seldak (Sprachverhalten und Literacy bei deutschsprachig aufwachsenden Kindern) も開発されて使用されている。

Sismikの対象は、約3歳半から就学期までの子どもたちで、様々な言語の発達、及び就学に関連した領域が把握されるように以下の様に構成されている<sup>26</sup>。

- ①狭義の言語能力（発音、文法）
- ②リテラシーの発達（本、物語、韻、文字への関心と能力）
- ③言語への関心とモチベーション
- ④子どもの家庭言語との付き合い、家庭における言語実践

### 2. 移民の背景を持つ子ども達のための準備コース

準備コースドイツ語240は、もともと、両親共に非ドイツ語圏出身者で、観察シート Sismik に従って適切な言語支援要求があると見なされた子ども達が対象であった。準備コースの期間は1年半に及び、就学の前々年の1月から就学直前の7月まで続く。幼稚園では準備コースは就学の前々年後半（1月）から就学まで、週に90分間保育者によって実施される。小学校側の準備コースは幼稚園最終年から就学まで実施され、週135分行われる。保育者と小学校教師の分担によって行われる。準備コースは幼児を6人から8人の小グルー

ブに分けて実施する内的分化の原理によって成り立っている。2013年より、「準備コースドイツ語240」は特別な言語支援のニーズを持つドイツ語話者の子ども達にも提供されることになった<sup>27</sup>。

## Ⅵ. 言語教育と参画

子ども達が教育プロセスを共同構築する教育をBEPは目指しており、それは、子どもと大人のパートナーとしての対話を前提とする<sup>28</sup>。対話と、それに関連させた言語支援は、BEPの様々な能力及び教育領域の本質的要素である<sup>29</sup>。

BEPでは、教育及び施設の出来事への子ども達の参画は、子ども達の言語能力を拡大することに決定的に貢献すると考えられている<sup>30</sup>。

「子ども達は他者と話し合うたっぷりとした機会と刺激を与えられる中で、話し合いの文化が必要となってくる。(中略)子ども達は大人や他の子ども達の関心を明らかに感じた時に、自分の心をとらえている事を話し始める。言語理解と表現能力に顧慮したこのような環境から利益を得るのは、まさに移民の背景を持つ子ども達である。(中略)子ども達が定期的に参画する時<sup>31</sup>、自分の話すことが傾聴され、自分の意見は重要であることを身をもって知ることになる。そして、子ども達は意見を述べる勇気を発揮し、ますます話す喜びが持てるようになる。」<sup>32</sup>

さらに、BEPによると、子ども会議などの言語に関連した活動への参画だけでなく、造形や運動などの活動への参画においても、言語は重要な役割を担っていると捉えられている<sup>33</sup>。参画はすべての教育領域を束ねる原理であり、方法であり、実践である。既述した様に、言語能力は参画のための前提条件である。しかし同時に、日常生活への参画によってしか、真の言語能力を習得することは出来ないというのが、BEPと保育現場を貫く考え方なのである。

ドイツの幼児教育は、多様性の教育を理論的支柱として、すべての子どもたちの参画を支援する方向に動いている。バイエルン州の準備コースドイツ語240が、2013年より、移民の背景を持つ、持たないに関わらず、ドイツ語の支援が必要なすべての子どもたちに開かれたのもその一環である。すべての子どもたちが早期に言語障壁を乗り越えて、社会に参画できる力を身につけさせるための措置なのである。

今後の課題は、Sismikの分析、言語教育担当の保育者へのインタビューによって、移民の背景を持つ子ども達の参画における言語教育の位置づけをさらに明確化することである。

## 謝辞

研究を支援してくださった元ミュンヘン市教育・スポーツ課のグレッチュ博士、ミュンヘン市立幼稚園一級保育者ベルガー有希子氏、及び保育施設の諸先生方に心より感謝申し上げます。

## 付記

本研究はJSPS科研費15K04304の助成を受けたものである。本論文は、その一部を日本保育学会第69回大会にて発表した。

## 註

<sup>1</sup> Kultusminister Konferenz, Jugendministerkonferenz 2004: Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen. Beschluss der Jugendministerkonferenz vom 13./14.05.2004/ Beschluss der Kultusministerkonferenz vom 03./04.06.2004. [http://www.kmk.org/fileadmin/veroeffentlichungen\\_beschluesse/2004/2004\\_06\\_03-Fruehe-Bildung-Kindertageseinrichtungen.pdf](http://www.kmk.org/fileadmin/veroeffentlichungen_beschluesse/2004/2004_06_03-Fruehe-Bildung-Kindertageseinrichtungen.pdf)(17.09.2014)

<sup>2</sup> Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie und Frauen & Staatsinstitut für Frühpädagogik(2013): Der Bayerische Bildungs- und Erziehungsplan für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung. Berlin: Cornelsen. (以下、BEPと略)

<sup>3</sup> Ministerium für Soziales, Gesundheit, Familie und Gleichstellung des Landes Schleswig-Holstein(2012): Erfolgreich starten. Leitlinien zum Bildungsauftrag in Kindertageseinrichtungen, Kiel.

<sup>4</sup> 船越美穂(2012)「幼児期における民主主義への教育(Ⅱ) —『バイエルン陶冶—訓育計画』における『参加』(Partizipation)の思想と実践—」『福岡教育大学紀要第61号第4分冊』77-88.

船越美穂(2013)「幼児期における民主主義への教育(Ⅲ) —Willy-Althof-Kindergartenにおける実践」『福岡教育大学紀要第62号第4分冊』95-107.

船越美穂(2015)「幼児期における民主主義への教育(Ⅴ) —シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州の保育施設における子ども達の参画—」『福



岡教育大学紀要第 64 号第 4 分冊』153-162.

<sup>5</sup> 船越美穂 (2016) 「ドイツの保育施設における子ども達の参画—多様性の教育を観点として—」『福岡教育大学紀要第 65 号第 4 分冊』73-84.

<sup>6</sup> Bundesamt für Migration und Flüchtlinge. Migrationsbericht 2013, Zentrale Ergebnisse, [http://www.bamf.de/SharedDocs/Anlagen/DE/Downloads/Infothek/Forschung/Studien/migrationsbericht-2013-zentrale-ergebnisse.pdf?\\_\\_blob=publicationFile](http://www.bamf.de/SharedDocs/Anlagen/DE/Downloads/Infothek/Forschung/Studien/migrationsbericht-2013-zentrale-ergebnisse.pdf?__blob=publicationFile) (2015.9.12)

<sup>7</sup> Spiegel Online Politik. Endlich verständlich: Fakten zur Flüchtlingskrise. <http://www.spiegel.de> (2016.4.4)

<sup>8</sup> BEP, S. 390.

<sup>9</sup> 小玉亮子 (2008) 「PISA ショックによる保育の学校化『境界線』を越える試み」泉千勢他編著『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店, 69-88.

<sup>10</sup> 中西さやか (2015) 「ドイツにおける就学前教育カリキュラムの改革動向—言語教育を中心として—」『名寄市立大学紀要第 9 巻』, 99-105.

<sup>11</sup> 恒川元行 (2014) 「バイエルン州労働・社会・家庭・統合省『子どもの教育と保育』ことばとりテラシー」『九州大学言語文化研究院 言語文化論究 No.33』, 135-147.

<sup>12</sup> ドイツでは 1990 年 1 月 26 日に子どもの権利条約に署名, 1992 年 4 月 5 日に発効した。

<sup>13</sup> BEP, S. 389.

<sup>14</sup> BEP, S. 389.

<sup>15</sup> BEP, S. 195.

<sup>16</sup> BEP, S. 195.

<sup>17</sup> Lisker, A. (2013): Sprachstandsfeststellung und Sprachförderung vor der Einschulung – Eine Bestandsaufnahme in den Ländern. Expertise im Auftrag des Deutschen Jugendinstituts. München, S.7. [http://www.dji.de/fileadmin/user\\_upload/bibs2014/Expertise\\_Sprachstandserhebung\\_Lisker\\_2013.pdf](http://www.dji.de/fileadmin/user_upload/bibs2014/Expertise_Sprachstandserhebung_Lisker_2013.pdf) (letzter Zugriff: 19.06.2016)

<sup>18</sup> BEP, S. 196-197.

<sup>19</sup> BEP, S. 196.

<sup>20</sup> BEP, S. 196.

<sup>21</sup> Landeshauptstadt München Schul- und Kultusreferat (2007). Münchner Werkbuch. München: Verlag Heinrich Vogel, S.52-53.

<sup>22</sup> BEP, S. 197.

<sup>23</sup> BEP, S. 208.

<sup>24</sup> BEP, S. 208.

<sup>25</sup> ミュンヘン市立 R 保育施設は幼稚園と学童保育併設型施設で, 子ども達の家 (Haus für Kinder) と呼ばれる。

<sup>26</sup> BEP, S. 200.

<sup>27</sup> バイエルン州労働, 社会, 家庭, 統合省ホームページ [stmas.bayern.de](http://stmas.bayern.de)

<sup>28</sup> BEP, S. 199.

<sup>29</sup> BEP, S. 199.

<sup>30</sup> BEP, S. 199.

<sup>31</sup> ここでは, 子ども会議 (Kinderkonferenzen) への参画を例に記載されている。

<sup>32</sup> BEP, S. 390.

<sup>33</sup> BEP, S. 390.

